

大阪工業大学 知的財産学部 基礎教育系

健康体育研究室

<http://www.oit.ac.jp/ip/~ken-tai/>
 健康体育事務局 ken-tai@ip.oit.ac.jp
 TEL 06-6954-4393 FAX 06-6952-9976

■健康体育研究室とは？■

知的財産学部、工学部の共通教育を担当する研究室で、身体活動を主体とした健康教育を行う研究室です。我々の研究室は、学際的な視点から、健康に関連した身体活動の必要性を研究し、その成果を教育に反映させています。

■スタッフ紹介■

- 浦井良太郎 助教授 元バスケットボール国際審判員 体育方法学
- 中村友浩 助教授 博士（理学）分子運動科学
 （大阪市立大学大学院理学研究科 細胞生物学 客員助教授）
- 木内敦詞 講師 体育学修士 運動生理学、健康行動実践学
- 荒井弘和 嘱託講師 博士（人間科学）スポーツ心理学
 （大阪大学大学院人間科学研究科 特任研究員）

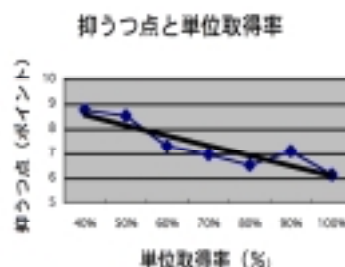
■現在の研究テーマ■

1. プロジェクト研究

1) 大学初年次における健康管理、自己管理能力育成に関する研究（研究リーダー：木内）

大学初年次教育プログラムの草分けであるアメリカのジョン・ガーナーが提唱した“初年次教育の質保証”のガイドラインに照らし合わせると、日本では概して大学生活の適応や人格形成の要素が少なく、基礎的学習スキルが重視されています。我々は大学への適応という観点から、初年次教育における健康管理、自己管理の視点に立ち、大学体育を利用した教育プログラムを開発し、その評価を行っています。

授業方法では、心理学の行動変容技法を積極的に導入し、学生の生活、健康習慣の改善レベル、身体的、心理的な変化を検証しています。たとえば、右の図に見られるようにHADSと呼ばれるメンタル調査で明らかにされたことは、初年次学生の抑うつレベルと単位取得率との間に密接な関係があります。初年次の抑うつレベルは大学生のリテンション（自校への残留率）にも深く関係しているため、今後、積極的にデータを集め、検証していきたいと考えています。



2) 健康留意者や障がい者のスポーツ習慣に関わる研究（研究リーダー：荒井）

少子高齢化社会は、障がい者の高齢化も促し、包括的生活支援が必要とされます。我々は、授業として健康留意者のための健康体育（アダプテッドコース）を開講しています。また、地域福祉が特に遅れている知的障がい者のスポーツ活動の研究も推進しています。運動やスポーツ活動が障がい者にどのような影響を与えるかという効果を生理的、心理的視点で検討しています。

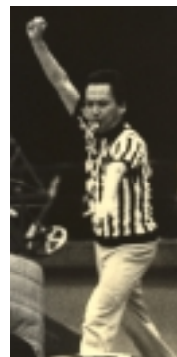


2. 個人研究、学外共同研究、社会貢献

1) 浦井良太郎

バスケットボールの競技的スポーツの面白さや文化的価値について研究し、教育にフィードバックしています。近年ではバスケット連盟などで主導的な立場に立ち、関西学生バスケット連盟審判部長、大阪バスケット協会審判委員長ならびに日本バスケット協会規則審判部などを歴任し、バスケット普及に関して社会的な活動を行っています。

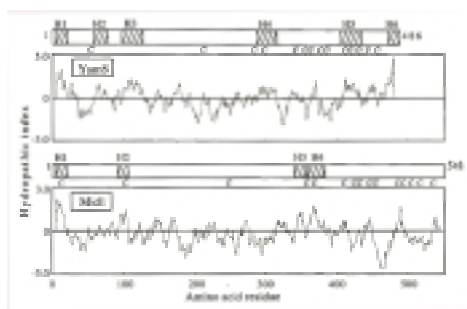
2003年度には大阪バスケット協会からこれらの社会的功績が認められ、感謝状が贈呈されました。特に日本では稀少価値といわれるFIBA国際審判員を務め、多くの海外遠征も経験しました。オールジャパン、インカレ等各種大会において活躍し、西日本学生選手権大会では多年に亘り、決勝において主審、副審を務め、NHK教育番組等で放映されました。このような経歴を生かし、バスケットの面白さ、特に競技スポーツとしての文化的価値について、研究しています。



2) 中村友浩

人間には地球上の重力や日常の身体活動など、物理的な力が常にかかっています。物理的な負荷によって人間は様々な生体反応を引き起こしますが、物理的な力が直接、細胞に与えるメカニズムについては不明な点が多く残されています。そこで私は、高等動物に進化系統上最も近いと言われる真核単細胞生物をモデルとして、物理的なストレスが細胞にどのようなシグナルを伝達するのか、そしてその分子は何かという事に興味を持っています。

現在は大阪市大理学部とスペインの研究グループと共同で、分裂酵母の機械受容イオンチャンネルYam8/Ehs1タンパク質の解析を開始しています。Yam8/Ehs1は機械受容チャンネルとして証明された出芽酵母Mid1とアミノ酸構造が類似しています。分裂酵母は出芽酵母よりヒトに近いことから新たな知見が得られると期待しています。



3) 木内敦詞

アマチュア野球において、指導者がチームの練習に毎日足を運べる状況は極めて少ないのが現状です。また、試合場面で必要とされる決断力・予測力・判断力を向上させるための実践練習は概して不足しがちです。そこで、これらの問題を緩和すべく、荒井講師とともに野球の走塁場面に限定した決断力・予測力・判断力を高めるための「走塁行動チェックリスト」の開発を進めています。これは、「塁間を何秒以内で走る」等の体力的要素以外の部分、すなわちプレイ選択や意思決定などの「行動要素」の改善をターゲットにした、走塁パフォーマンス向上のためのツールです。認知行動的側面に働きかけるこの走塁行動チェックリストによって、走塁場面における決断力・予測力・判断力の向上が期待されます。

4) 荒井弘和

私は、大きく分けて2種類の研究に取り組んでいます。1つは、「スポーツ心理学」の研究です。スポーツ選手に対して、メンタル面（心理面）のサポートを行っています。たとえば、試合でリラックス状態を保つためのメンタルトレーニングや、試合に向けたメンタル・コンディショニングについて研究しています。アジア大会、世界選手権、オリンピック予選を中心として、野球の日本代表チームのサポート補助員として活動した経験もあります。もう1つは、「運動心理学」の研究です。こちらは、スポーツや運動の実践と、メンタルヘルス（精神的健康）との関係について研究しています。また、メンタルヘルスがよ

くなるような運動の方法についても、自らの研究結果を基に提案しています。

現在、私が最も興味を持って取り組んでいる研究は、肺がん患者を対象としたフィジカル・リハビリテーションの研究です。肺がんは予後が良くないといわれており、回復が難しい病気です。外科医、内科医、看護師、理学療法士、心理学者、および運動科学者で構成される我々の研究グループでは、肺がんを患っている方々が、クオリティ・オブ・ライフ（Quality of Life）を保ったまま闘病生活を送れるように、肺がん患者のフィジカル・リハビリテーションに関する研究を行っています。具体的には、患者さんの詳細な活動情報をモニタできるライフコーダという機器を用いて、患者さんが廃用症候群（身体を使わないことによって身体的・精神的機能低下が生じること）にならないようにアドバイスを行っています。

●概念図

